

第一章 「常陸風土記」より

〔筑波の古老〕

昔。神祖の神の尊、国々を巡り、日暮れに、駿河の国の富士の山に至り、一夜の宿を請うた。富士の神は、尊に答えて言った。

〔富士山の女神〕

「新粟の初嘗して 家内諱忌せり。今日の間は え許しまをさじ。」

〔筑波の古老〕

神祖の神の尊は、恨み泣き、富士の山を呪って言った。

〔祖神の尊〕

「汝が親をば 何とてか 宿さむとはせぬ。汝が居める山は生涯之極 冬も夏も 雪霜ふり 冷寒重襲り 人民登らず飲食奠る者勿けむ。」

〔筑波の古老〕

神祖の神の尊は、筑波の山に登り、再び宿を請うた。筑波の神は、答えて言った。

〔筑波の女神〕

「今夜新粟嘗すれども 敢えて尊旨にたがえ奉らじ。」

〔筑波の古老〕

筑波の神は、酒魚取りそろえ、尊を敬いもてなした。神祖の神の尊は喜び歌い、筑波の山を寿いで言った。

〔祖神の尊〕

「愛しきかも 我子孫 高きかも 神宮 天地の共 日月の共人民集ひ賀ぎ 飲食豊かに 代々に絶ゆることなく 日に日に弥栄えむ 千秋万歳に 遊樂窮らじ」

第二章

a. Hozashi

〔台湾中部 Venun 族の歌垣〕

エ ホイヤ ホイヤ アア

エ ホイヤ ホイヤ エエ

b. うるわしと

〔夷振の上歌、古事記歌謡 80〕

愛しと さ寝しさ寝てば 刈薦の 乱れば乱れ さ寝しさ寝てば

〔天田振、古事記歌謡 84〕

天飛む 軽嬢子 しただにも 寄り寝て通れ 軽嬢子ども

c. むかつをに

〔はねつけ歌、日本書紀歌謡 108〕

向つ峰に 立てる夫らが 柔手こそ 我が手を取らめ 誰が裂手 裂手そもや 我が手取らずもや

d. もの思はず

〔万葉集 3309、柿本朝臣人麿の集の歌〕

物思はず 路行く行くも 青山を 放りさけ見れば つつじ花 香え少女 桜花 栄え少女 汝をぞもわれに寄すとふ われをぞも 汝に寄すとふ 汝はいかに思ふや 思へこそ 歳の八年を 切髪の よちこを過ぎ 橋の 末枝を過ぐり この川の 下にも長く 汝が心待て

e. つくはねの

〔八重山の「トゥバルマ」の旋律による、高音と低音〕

〔万葉集 東歌（常陸国の歌）3350〕

筑波嶺の 新桑繭の 衣はあれど 君が御衣し あやに着欲しも

〔万葉集 東歌（常陸国の歌）3351〕

筑波嶺に 雪かも降らる 否をかも かなしき児ろが 布乾さるかも

第三章

a. 雅歌 2章 10~13 (小川国夫訳)

愛する人、わが愛する美しい人

起きて、外に立ちなさい。

ごらん、冬は過ぎ去り

冷たい大雨も遠ざかって行きました。  
野には花が咲いて、風も香っています。  
歌の季節が来たのです、  
山鳩の歌が、この国に流れる季節が来たのです。

いちじくの木は、もう実を結び  
ぶどうは花をつけて、甘い匂いをふりまいています。  
愛する人、わが愛する美しい人  
起きて、外に立ちなさい。

b. 雅歌 2章 16～17 (小川国夫訳)  
愛していますから、あの人はわたしのもの。  
わたしはあの人のもの。  
あの人はゆりの花に囲まれて、羊を飼っています。  
いとしい人よ  
夕べの風が吹き始めて影がまぎれる前に  
帰って来てください。  
そして、険しい山に住むかもしかのような、  
若い雄鹿のような姿を見せてください。

c. 雅歌 7章 11～12 (小川国夫訳)  
愛する人よ、家を出て野に行き  
ヘナの木の花に包まれて夜を過ごしましょう。  
そして、朝早く起きてぶどう畑に行き  
枝が芽を出し  
花をつけたかどうか眺めましょう。  
それから、私の愛をあなたに捧げます。

d. 結びのうた (小川国夫訳)  
川の便りを知らせてください。  
彼らは速い谷をくだるのに、今もあの特別な姿をしているのでしょうか。  
ポプラ並木の便りも知りたい。  
彼らのなつかしい声が聞こえるような便りをください。  
鳥よ、便りをください。  
春がすみの中で、険しい谷の隙間で、  
鳥よ、どのように生きているのですか。  
汝よ、限りなく自由な波よ、知らせてください、  
不思議な生きかたをやめない海と魚達の秘密を。  
闇よ、限りなく豊かな闇よ、  
あなたが腕に抱いているものたちは、どのように、  
新しく生まれる準備をしているのでしょうか。  
その沈黙を聞かせてください。  
光よ、あなたは自分を  
すべての時と所に注いでくれるのでしょうか。  
すべての人の家と人の胸に注いでくれるのでしょうか。  
希望します。  
どうかその意思を、打ち明けてください。